

「我なんじらを世よりえらびたり」

田村眞生子

「汝らもしこの世のものならば、世は己がものを愛すならん。汝らは世のものならず。我なんじらを世より選びたり。この故に世は汝等を憎む。」(ヨハネ伝十五章十九節)

これは一九六〇年一月五日、田村明と私の婚約式の折に、明が眞生子に贈った聖書の扉に書いてくれた聖句である。内村鑑三から始まった無教会では(特に矢内原忠雄の集会では)婚約式に自分の覚悟、願いを聖句に託して聖書を交換する習いがあった。これを読んだ時、何か震えるような厳しさを感じたが、その時、私にはその真意が殆ど分っていないかっただと思う。まだ何も自分らしい人生を歩み出していない若い彼が、どのようにしてこの句を選んだのか、について充分話し合う機会なく彼が旅立ってしまったことを、今にして大変残念に思うが、今、彼の生涯を顧みる時、あの若き日、人生何をすべきか悩み、遂に天職と信じる「まちづくり」に出会って、日本にひろめ根づかせてゆく仕事に打込んだ時、あれほど烈しい困難や反対と闘ってゆけたのは、正にこの覚悟、信仰を持ちつづけていたからだ。今、しみじみと振り返らせられている。私は傍にいて、何ほどの支えにもなり得なかつたことを申し訳なく思うが、同じ天を仰ぎ、共に歩ませて頂いたこと、感謝でいっぱいである。

今号の花冷え、という題も、はやそぐわなくなりました。

今は若葉冷え、というところでしょうか。